

ベトナム戦争の枯れ葉剤被害を研究
 城戸 照彦さん (65)



公衆衛生の専門家として約十六年間、ベトナム戦争で米軍が散布した枯れ葉剤による現地の健康被害を研究し続けている。来春からは、汚染が深刻だった中部のフーカット県で、国際協力機構（JICA）の事業として、新たに低体重児の発育改善に取り組む。

米軍が枯れ葉剤の貯蔵タンクを置いてフーカット県では今も、多くの母親の母乳から高い濃度のダイオキシンが検出される。調査し

この人

たところ、二・五キログラム未満の体重で生まれる子の割合が、非汚染地域の約三倍だった。

こうした事情は、地元でも広く知られていない。新事業では地域の医療スタッフらに対し、ダイオキシンの精密分析のやり方を指導したり、早期離乳の必要性などを伝えたりする。「現地の人が自らの課題として取り組んでほしい」

横浜出身。金沢大卒業後、千葉大、金沢医科大学の助教授を経て母校の教授に。一九九〇年代、埼玉県所沢市などでダイオキシン汚染が注目されたことをきっかけに、ベトナムでの研究に取り組み始めた。「積み重ねて十数年。この間、いろんな人とつながりができた。（研究を長く続けるには）出会いは大切ですね」（村松秀規）